

二〇二四年六月二一日

桑の実を煮つめし匙の黒光り  
大小の棚田に渡る代田水  
新茶注ぎ下戸の佛に二タ三言  
炎昼や波音だけの漁師町  
夏草を絡め取りたる牛の舌  
雨上がりエプロンに摘む茗荷の子

む べ  
千 鶴  
よし女  
みきお  
みきお  
康 子

二〇二四年六月二〇日

摘み取りて虹色放つ初なすび  
駒を打つ棋士の指先所作涼し  
雨の中峡田を低く飛ぶ燕  
雫手で受けて酌する冷酒瓶  
霊岩に凭れ涼風賜はれり

よし女  
あひる  
うつき  
かえる  
なつき

二〇二四年六月一九日

十葉の虜となりし空き家かな  
吉野窓透けてお庭の緑さす  
よく冷えしペットボトルを頬に当て  
我が影に侍るがごとく草を引く  
怒り貌せし兜虫よく売れる  
背なの子のぐずりサンダル脱ぎ飛ばす  
一太刀のバットに西瓜砕けたり

澄 子  
も ところ  
あひる  
うつき  
よし女  
風 民  
山 椒

二〇二四年六月一八日

白薔薇の淡きみどりをふふみけり  
手で割きし水茄子漬や糠香る

む べ  
む べ

売家札立ちて紫陽花盛んなり

うつき

朝市や曲りし胡瓜詰め放題

なつき

繁茂せる十葉搔きし鎌匂ふ

かえる

二〇二四年六月一七日

一村の見渡す限り麦熟るる  
漱ぐ宇治の名水てふ清水  
双子なり泣く子笑ふ子花柘榴  
ヨットいま舳先持ち上ぐ波頭  
日の落ちて水辺を綴る蛍かな  
紫陽花の毬の寧けし花手水

千 鶴  
せいじ  
もとこ  
かえる  
かえる  
たか子

二〇二四年六月一六日

紫と蒼のきざはし濃紫陽花  
扇忙し投句の刻の迫り来し  
鱧釣りや磯に未明の月白し

む べ  
うつき  
千 鶴

二〇二四年六月一五日

藍染の竿に靡ける薫風裡  
茅葺の屋根の厚さや庵涼し  
植田いま風を誘ふ丈となり  
睡蓮の浮葉の揺れて鯉の口  
父の日や怒りし顔の遂に見ず

む べ  
も ところ  
明日香  
あひる  
うつき

毎日句会みのる選・二〇二四年六月二三日